

ノダは「説明のモダリティ」か

名嶋義直

東北大学大学院文学研究科

1. はじめに

まず、ノダを「説明のモダリティ」と考えることによって生じる問題点を確認する。次に、いわゆる「階層的モダリティ論」に対する批判的検討を行っている研究を概観し、「ノダはある命題を『解釈として』描く際に用いる形式である」という文法的位置づけ（仮説）を提唱する。

2. 先行研究とその問題点

①意味的な階層構造モダリティ観における問題点

「[[命題] モダリティ] といった層状構造も、形態の線条性のレベルで解されるべきではなく意味や働きレベルにおいて理解されるべきものである」（仁田（1999：38））

→相互承接の前後関係が必ずしも意味的な階層構造を反映していると考えなくともよい。

- ・問題1：相互承接の順序が構造上異なる二形式が意味的に同義となる可能性を排除できない。

例えば、ノダッタ／タノダ、ノカモシレナイ／カモシレナイノダ間の差異をどう記述するか。

- ・問題1の解決案：構文的な階層構造を想定

命題をモダリティが包む、コトガラめあてのモダリティを聞き手めあてのモダリティが包む。

→前部要素から後部要素へという線条性を基準とすることで両義性を排除できるが問題2発生。

- ・問題2：構文的な階層構造に基づく記述と「説明」という記述との整合性。

ノダを「説明のモダリティ」とするならば、ノダッタは「説明+過去・完了」となる。しかし、ノダッタは「過去の説明／説明が完了した」という意味ではない。あえて「説明」と言えば、「～のだった」と言うことそれ自体が「説明」と言うべきである。

- ・問題2の解決案：意味的な階層構造を想定

ノダが前部要素であっても『過去命題（～タ）』をノダで説明している」という記述が可能。

但し、ノダッタとタノダとが同じ意味を表しうるという先述の問題1が生じる。

②従属節との関係における問題点¹

文末のノダは「説明のモダリティ」、従属句のノダ変異形は接続形式、ノを名詞化のための準

¹ 田野村（2004：223-225）は階層的モダリティ観に立った場合に生じる「従属節とモダリティ」という問題を指摘している。ここで問題とするのはノデ・ノダカラ・ノナラなどである。三尾（1958：274）、国広（1992：28-31）はノデを「『のだ』の接続形の『ので』」としている。

体助詞・形式名詞と考えると、包括的な意味記述も「説明」の観点からの記述も共に困難。²
⇒「説明のモダリティ」の観点から説明しようとするといずれも異形態の記述が困難となる。
⇒ノダの本質を記述しているのではない可能性がある。

3. 問題解決に向けて－「固有の描き方」を担うという視点－

①大鹿論文・尾上論文・野村論文(参考文献参照)：「叙法形式」として助動詞を捉える述語観。

②名嶋(2002)

1)「説明のノダ」は、「発話時において話し手や第三者が有しているある思考」を「聞き手側から見た解釈として」「意図的、かつ、意図明示的に」「聞き手に対して提示する」。

2)「説明のノダ」の使用は、「解釈として受け入れさせよう」という話し手の聞き手に対する発話意図を聞き手に対して伝達する。(注：名嶋(2002)では「説明のノダ」の伝達的機能・「解釈として～提示する」という部分はノダを一種の叙法形式として捉えている。

⇒『ノダそれ自体が』『説明・強調』といったモダリティである」とは考えない。

・『ノダの使用が』『モダリティ的意味を生じさせる』と考えている。

⇒「モダリティ：専用の述定形式(叙法形式、文末外接形式)を用いて非現実事態を語ることによって文に生ずる意味」(尾上(2004：136))というモダリティ観に通ずる部分がある。

・「解釈」をどう定義づけるかという大問題がある。

4. ノダの文法論的位置づけ

①なぜ「の」で体言化するのか

・「体言とは、素材概念を表示する以外に、構文的職能をもたない」(山口(1976：166))

→既定命題として提示しているという考え³

→形容詞文・動詞文も陳述可能。あえてノダ文を選択する場面があるのはなぜか。⁴

②山田(1936：92)：「体言は概念をあらわす語なり。一中略一実³に吾人が胸中に於いて一の概念として思惟するものは悉く体言たることを得るなり」

③思考の中に存在している概念を言語化する二通りの描き方

1)当該事態の属性(内容)を描く方法

(1)(雨が降っていることを知っていて)雨が降っている。

² 従属節の問題については益岡(2001：24)でも今後の課題とされている。

³ 吉田(2000：20)では「『の』によって括られることで、叙述内容は<文そのもの>ではない<文の材料>となって、文の成立以前から自存する確かな<知識の一項目>となるのである」と述べている。

⁴ 吉田(2000)の表現で言えば、「<文の材料>」として描く、「文の成立以前から自存する確かな<知識の一項目>」として描くことの必然性が明確にされていないということである。「既定命題として描くのはなぜか」と言い換えてもよい。

2) 一つの素材として描く方法

(2) 「雨が降っている」のは困る。

3) 2つの「雨が降っている」とノダ文

・「雨が降っているのだ」というノダ文を構成する「雨が降っている」は1)・2)のどちらか。
→先行研究は、構文的には2) (文の要素)、意味的には1) (現実世界の事態) と捉えてきた。
⇒この捉え方を無批判に受け入れていいか。

4) 「事態を事態として」捉えるか「概念(思考)化して」捉えるかという捉え方の対立

・事態か概念かの区別は形態的特徴から区別可能であると思われがちだが、そうとも言えない。

(3) 悠作「オレ、行かないよ」

保「なに言ってんの、家族旅行だよ」

悠作「勉強する」

((4) を一部変更)

(4) 悠作「オレ、行かないよ」

保「なに言ってんの、家族旅行だよ」

悠作「勉強するの」 (<http://www.plala.or.jp/ban/ps201.html>, 2005. 3. 8 閲覧)

→事態／概念のどちらを描いているのか明示する必要があったり、明示したいと意図したりする場合があるにも関わらず、言語形式によってはどちらであるかを判断できない場合がある。
⇒ノダ文はその「概念として描く」という描き方を担っていると推察できる。

④「概念として描く」ことの意味

・ノダ文は [A ハ B ノダ] という構造を持つ。⁵これは言い換えれば、「B ノ」が、主題 A に対する解説であり、B の内実は A を「何らかの観点から捉えたもの」であるということになる。

→「A を B と解釈する」ということ。B は「事態」ではなく、「概念(思考)」である。

→ノダが提示する命題は「客観的な既定の事態として」提示されているのではなく、「何らかのモノ・コト・カンガエをある観点から捉えた解釈として」提示されている、と考えられる。

⇒非ノダ文は命題を「事態として」描いている。ノダ文は後接する命題を「解釈として」描いている。ある命題を「解釈として描く」ことがノダ文の文法的な意味である。

(6) 仮説：ノダは後接する命題を「解釈として描く」形式である。

ノダそれ自体は当該命題が「解釈として描かれている」ことを示してはいるが『何に対する』『如何なる視点からの』解釈として描かれているかを示してはいない。聞き手は主題・文脈・発話状況などから、何に対するどのような観点からの解釈とするのが妥当であるかを推論する。

⁵ この点において「…のは…のだ」を「を」をノダ文の「基本形」としてとし、「『××トイウコトハ○○トイウコトダ』という内容を表わす文である」と述べた山口(1975)の論考は、構造に関しては、的を射ていたと言えよう。また、先行研究で指摘されているようにAに当たる要素は、モノ、コト、先行発話、発話の状況、非言語情報など、非常に多種多様であるし、必ずしも言語化されるとは限らない。

そこから、一つのノダ文が語用論的に決定される多種多様な表面的意味を持つことになる。

参考文献

- 大鹿薫久 (1995) 「本体把握—「らしい」の説—」, 『宮地裕・敦子先生古希記念論集 日本語の研究』, 明治書院, pp. 525-548.
- 大鹿薫久 (2004) 「モダリティを文法史的に見る」, 北原保雄監修, 尾上圭介編集『朝倉日本語講座 6 文法Ⅱ』, 朝倉書店, pp. 193-214.
- 尾上圭介 (1990) 「文法論—陳述論の誕生と終焉—」, 『国語と国文学』 67-5, 東京大学国語国文学会, 至文堂, pp. 1-16.
- 尾上圭介 (2001) 『文法と意味Ⅰ』, くろしお出版.
- 尾上圭介 (2004) 「述語論の方法」, 『日本言語学会夏期講座 2004 Seminar handbook』, 日本語学会夏期講座配付資料, pp. 115-140.
- 国広哲弥 (1992) 「『のだ』から『のに』・『ので』へ」—『の』の共通性」, カッケンブッシュ寛子他編『日本語研究と日本語教育』, 名古屋大学出版会, pp. 17-34.
- 田野村忠温 (2004) 「現代語のモダリティ」, 北原保雄監修, 尾上圭介編集『朝倉日本語講座 6 文法Ⅱ』, 朝倉書店, pp. 215-234.
- 名嶋義直 (2002) 「ノダ文の認知語用論的研究—関連性理論の観点から—」, 未公刊博士論文, 名古屋大学.
- 仁田義雄 (1999) 「モダリティを求めて」, 『言語』 28-6, 大修館書店, pp. 34-44.
- 仁田義雄 (2000) 「認識のモダリティとその周辺」, 森山卓郎・仁田義雄・工藤浩著『日本語の文法 3 モダリティ』, 岩波書店, pp. 81-159.
- 野村剛史 (1991) 「助動詞とは何か—その批判的検討—」, 『国語学』 165, 国語学会, pp. 38-52.
- 野村剛史 (2003) 「モダリティ形式の分類」, 『国語学』 54-1, 国語学会, pp. 17-31.
- 益岡隆志 (2001) 「説明・判断のモダリティ」『神戸外大論叢』 52-4, 神戸市外国語大学研究会, pp. 1-25.
- 三尾砂 (1958) 『話しことばの文法』, 法政大学出版局.
- 山口佳紀 (1976) 「体言」, 大野晋・柴田武編集委員『岩波講座 日本語 6 文法Ⅰ』, 岩波書店, pp. 129-168.
- 山口佳也 (1975) 「『のだ』の文について」, 『国文学研究』 56, 早稲田大学国文学会, pp. 12-24.
- 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』, 實文館.
- 山田孝雄 (1936) 『日本文法学概論』, 實文館.
- 吉田茂晃 (2000) 「<ノダ>の表現内容と語性について—<ノダ>は『説明の助動詞』か—」, 『山邊道』, 天理大学国語国文学会, pp. 17-31.